

# モード Mode は語る

中野 香織

## 社交界のSNS投稿

米国の有名人、キム・カーダシアンが40歳の誕生日を祝うため、家族や友人約30人とタヒチのプライベートアイランドで過ごした。貸し切り飛行機で向かい、パーティー後もバカンスを続行。彼女はその模様をSNSに投稿し「自分の人生がどれだけ恵まれているか実感している」と書いた。新型コロナ禍に苦しむ世間の神経を逆なでし、大炎上となった。

豪勢なパーティーをするなら内輪で楽しめばよいのに、なぜSNSに投稿するのか？パーティーは、観客がいてこそ面白くなるからだ。

そのことが理解できるドキュメン

# 人の神経逆なでもろ刃の剣



映画「トルーマン・カポータ 真実のテープ」の一場面©2019. Hatch House Media Ltd.

タリー映画が公開された。「トルーマン・カポータ 真実のテープ」である。「ティファニーで朝食を」や「冷血」で知られるカポータだ

が、同時代には社交人士として名をはせた。映画には、1966年に彼がニューヨークのプラザホテルで開催した「黒と白の舞踏会」も描かれる。

カポータは米欧から招く500人の著名人リストを3カ月かけて作成した。しかもそれをニューヨーク・タイムズ紙上で公開した。この異例なやり方によって「選ばれた」側は虚栄心をくすぐられ、「選ばれなかった」人は「招かれたけど断った」という取り繕いの余地も与えられず屈辱感を耐え忍ぶ羽目になった。無関係な人は、どろどろの感情渦巻く人間模様を面白がると同時に、招待

客の装いや振る舞いをテレビで楽しんだ。パーティーを見ながら沸き起こる嫉妬や憧れ、軽蔑や憐憫（れんびん）もスパイスになる。

内外の感情が絡み合い壮大なパーティーは成功。カポータ渾身（こんしん）のリストは彼の作品のなかでも別格の傑作。パーティーは20世紀米国の社会史的イベントとなった。

気をよくしたカポータは、ある作品を契機に転落の道をたどる。社交界の栄光は人の感情を扱い損ねるとあっという間に崩れるのだ。

周囲をざわつかせて存在感を発揮する人は、SNS時代の今日、増えているように見える。「ふつう」の日本人も「今日は仲良しと集まりました」と無遠慮に投稿する。カーダシアン家を笑えない。（服飾史家）